アメリカの畜産物貿易の構造変化

1　はじめに

2003年12月にそれまで懸念されてきたアメリカでのBSE（牛海綿状脳症）発生が現実のものとなった。日本国内で発生したBSEの影響がようやく沈静化してきたところだけに、牛肉輸入量の半分近く、国内流通量の30％を占めるアメリカ産牛肉の輸入禁止は、外食産業を中心に深刻な影響を与え始めている。

また、今回のBSE騒動はグローバルに展開する農畜産貿易の一断面を明らかにした。DNA鑑定によってBSEに感染した牛は、子牛の時にカナダから輸入されたことが判明した。アメリカ側は、この結果を受けて早期の輸入再開を主張しようとしているが、問題は大量の家畜が生体で国境を越えて大量に取引されていることである。

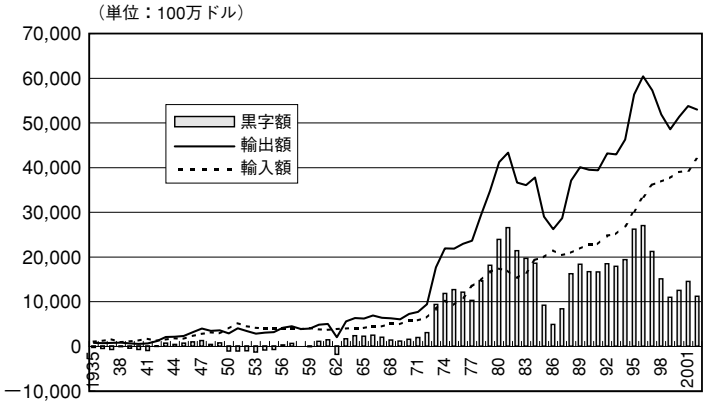
そこで、本論では、特にカナダ、メキシコとの貿易に焦点を当てて、アメリカの畜産物貿易の実態について検討する。まず２章でアメリカの農畜産物貿易を概観し、3章でその構造的特徴について検討する。

2　北米地域における域内貿易の拡大

(1)　アメリカの農畜産物貿易の特徴

まず、アメリカの農畜産物貿易に関する近年の傾向について簡単に触れておこう(図１)。アメリカの農畜産物輸出は、70年代の穀物輸出の拡大を契機に急増したが、80年代半ばの穀物価格の急落によって輸出は縮小し、貿易黒字は大きく減少する。その後再び輸出が回復するが、90年代後半になると輸入の増加率が輸出の増加率を超える状態が続いたため、黒字額は再び縮小する傾向にある。

図１　アメリカの農産物貿易の推移

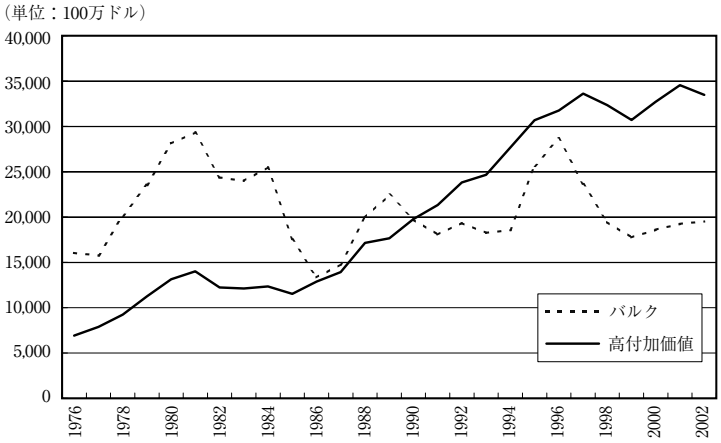


資料：USDA FASの資料より筆者作成

アメリカの農畜産物輸出品目の中で伸びているのが高付加価値品目である。96年をピークとする穀物価格の上昇によって一時的にバルク輸出が増えるが、90年以降は高付加価値製品がバルク製品を追い越し、高付加価値製品が輸出の主力を担いつつある（図２）[1)]。その中でも重要なのが食肉製品である。USDAのERSのデータによると90年代前半（1990～96）と後半（1997～2000）の平均輸出額は86億ドルから109億ドルへ大幅に増加している[2)]。また野菜の輸出も同時期に30億ドルから43億ドルに増えている。これに対して、バルク輸出は軒並み減少している。穀物は同時期に120億ドルから99億ドルまで減少し、食肉製品に追い越されるに至った。

貿易相手地域別にみると、近年のアメリカの農畜産物貿易で顕著なのが、NAFTAを締結したカナダ、メキシコとの貿易の拡大であ

図２　バルク製品と高付加価値製品輸出額の推移



資料：USDA ERSの資料より作成
注：バルクには、小麦、米、飼料作物、油糧種子、綿花、タバコが含まれる。

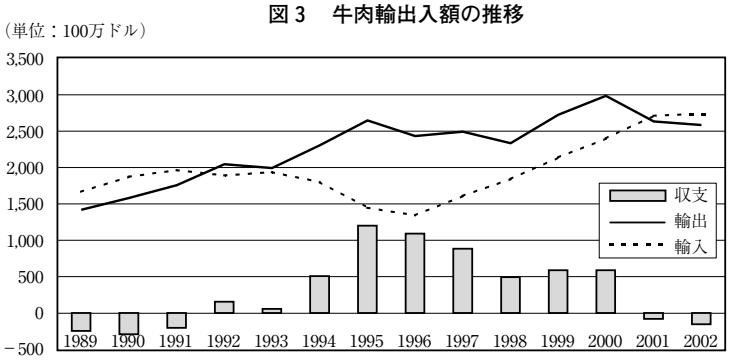
る。同じUSDAのデータから、90年代前半（1990～96）と後半（1997～2000）の相手地域（国）別平均輸出額をみると、日本（93億ドル→96億ドル）とEU（76億ドル→77億ドル）が横ばいなのに対して、カナダ（51億ドル→70億ドル）とメキシコ（37億ドル→58億ドル）への輸出の伸びが著しい。これは輸入についても同様で、カナダ（46億ドル→79億ドル）とメキシコ（29億ドル→46億ドル）からの輸入が急増している。特にカナダからの輸入額はEU（53億ドル→75億ドル）を上回るほどである。

以上がアメリカの農畜産物貿易の概要であるが、次に高付加価値製品の代表である畜産について分析を進める。

(2)　急速に統合化される畜産物市場

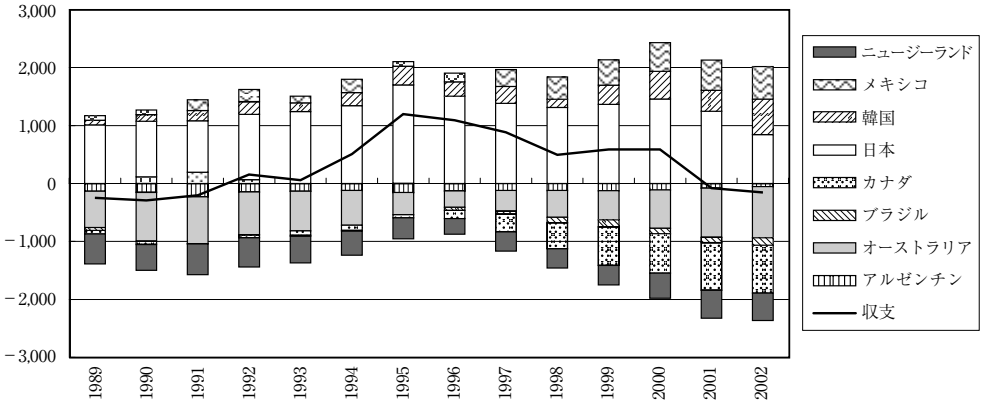
まず、牛肉貿易についてみてみよう。アメリカの牛肉貿易は、90年代は輸出超過で黒字を記録していたが、97年頃から輸入が急激に増え、2001年には輸入額が輸出額を超え赤字に転換している（図３）。収支が赤字に転落した最大の要因はカナダとオーストラリア、特に対カナダ貿易の赤字である。対カナダ貿易は96年に赤字に転落すると、その後急激に赤字額を拡大していった（図４）。逆にメキシコに対しては、同時期に輸出の増加によって黒字額が拡大したが、対カナダ貿易の赤字額を埋めるほどではない。ただし、日

図３　牛肉輸出入額の推移



資料：USDAの貿易データベース（Fatus）より作成

図４　牛肉貿易の相手国別収支



資料：図３と同じ

本市場が2002年にBSEの影響で縮小しただけに、メキシコは相対的に輸出市場としての重要性を増している。

2002年の輸出総額に占める国別シェアをみると、日本（33%）と韓国（24%）、メキシコ（23%）だけで約80%を記録している。このように少数の国に集中する傾向は輸入についても当てはまる。2002年の輸入総額に占める主要輸入相手国のシェアをみると、カナダ（41%）とオーストラリア（32%）、ニュージーランド（17%）の3国だけで90%に達している。

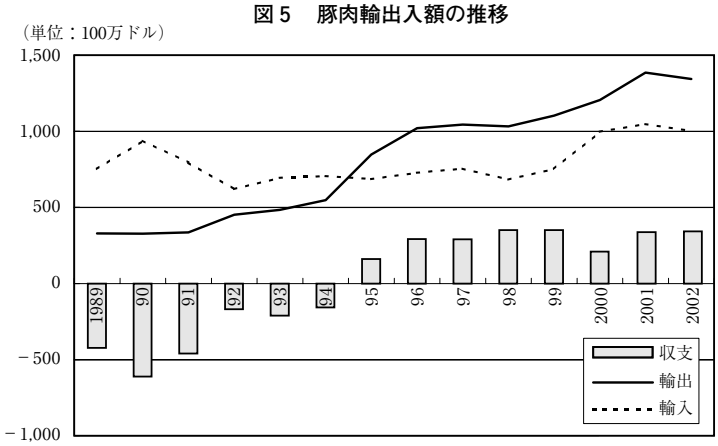
次に豚肉についてみてみよう。豚肉の貿易は、輸入の拡大が著しかった牛肉とは対照的に輸入が輸出を超過する赤字状態が続いた。しかしながら、黒字に転換した95年頃から輸出が順調に拡大し、2002年には13億ドルにまで達している。ただし、輸入額も輸出額と同じように拡大しているために、黒字額は3億ドル程度で推移している（図5）。

輸出相手国別にみると対日輸出が最も大きい（図6）。ただし、96年に74%にまで拡大すると、その後はやや減少に転じ、その後60%前後で推移している。対照的にシェアを伸ばしているのがカナダやメキシコである。特にカナダのシェアは96年頃の6%前後から増えつづけ、2002年には12%に達している。対メキシコ輸出も90年代初頭から半ばにかけて減少しそのシェアを落とすものの、97年から拡大に転じ現在では13%近くを占めている。

輸入相手国別にみると、最大の輸入相手国はカナダで2002年時点の輸入総額の約74%と圧倒的なシェアを占めている。輸出においてカナダのシェアが増えているとはいえ、対カナダ貿易はアメリカにとっては大幅赤字である。

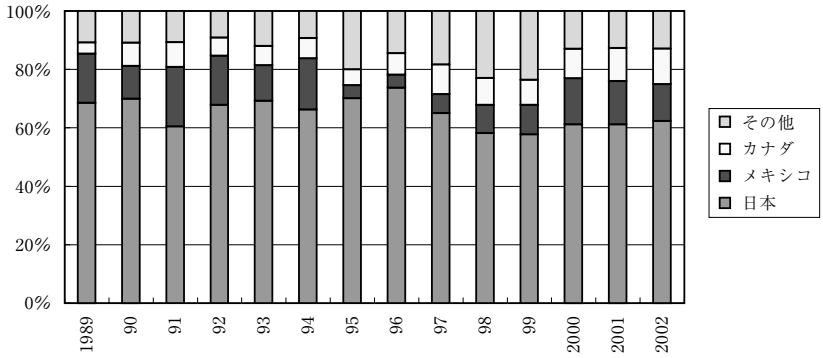
また、カナダのシェアの推移は、第2位のデンマークと比較すると興味深い。90年にはカナダとデンマークのシェアは46%と32%と接近していたが、その後デンマークからの輸入額が減少したために、同国のシェアは低下傾向を示し、2002年にはわずか17%である。なお、メキシコからの輸入額は近年急増しているが、そのシェアはわずか0.1%と無視しうる程度である。

図5　豚肉輸出入額の推移



資料：図3と同じ

図6　アメリカの豚肉の輸出相手国別シェアの推移



資料：図3と同じ

図７－１　対カナダ牛肉貿易の推移

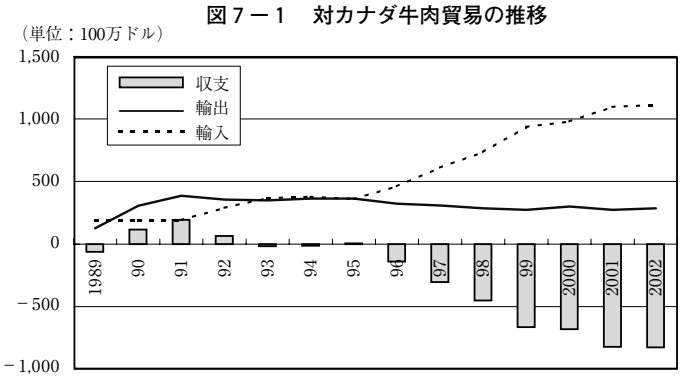
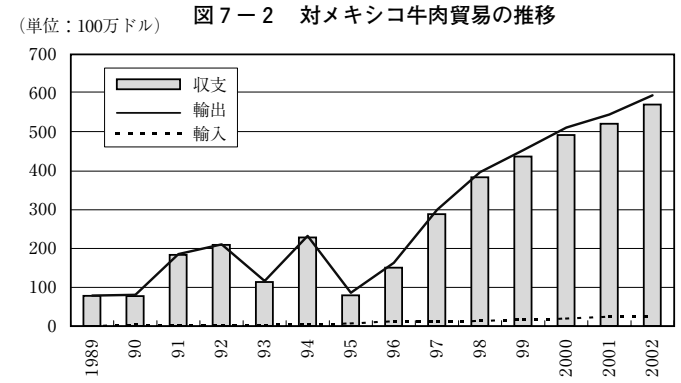


図７－２　対メキシコ牛肉貿易の推移



資料：図３と同じ

３　北米地域における地域内貿易の構造

このような分析結果を整理すると、次のような特徴が明らかとなる。まず、牛肉にしても豚肉にしても、北米地域内の取引は一方通行である。図７－１、２はアメリカの対カナダおよびメキシコの牛肉取引を示したものである。これによると、90年代半ばから対カナダ貿易では輸入が、対メキシコ貿易では輸出が、連動するかのように急激に増加している。また、メキシコからの輸入は文字通り無視できるほど小さいし、カナダへの輸出にしても輸入額の25％程度である。

これは豚肉でも同様である。対メキシコ貿易では輸入規模は極めて小さく無視できるほどであるため、対メキシコ貿易はアメリカの一方的な輸出から黒字が続いている。対カナダ貿易も牛肉同様に、アメリカの大幅な赤字で、輸出額も輸入額の22％程度である。ただし、赤字額の推移は牛肉ほど明確に対メキシコ輸出と連動しているわけではなく、90年代初頭より３～４億ドル程度で推移して、ようやく2000年頃から拡大し始めている。

このように、アメリカとカナダ、メキシコの間の貿易は、牛肉と豚肉の両方で、一方通行でおこなわれている。たしかに、アメリカの畜産貿易において北米の比重は大きくなっているが、実際にはカナダ→アメリカ→メキシコとほぼ一方的に流通している。アメリカにとっては、対カナダ貿易は赤字で対メキシコ貿易は黒字という構造になっている。

それでもアメリカの畜産貿易がバランスを取ることができるのは、対日貿易における巨大な輸出超過があるからである。豚肉が95年から黒字に転換したのは、対日貿易の黒字額がカナダやデンマークとの間の赤字額を相殺できる規模に拡大したからである。それはメキシコにとっても同じで、その輸出の大半を日本に依存しているという構造を有している[3)]。その意味では、デンマークなどの北米地域外から北米域内へ貿易の主軸が移行しているとはいうものの、あくまでも日本が輸出市場として緩衝材の役割を演じているからとも考えられる。

これは牛肉の場合でも同じである。豚肉の主要貿易相手国に輸出では韓国が、輸入ではオーストラリアやニュージーランドが加わるが、基本的には豚肉と同じ貿易構造を有している（図８－１、２）。アメリカは、対カナダやオーストラリア、ニュージーランド貿易の赤字を日本と韓国、あるいはメキシコへの

図８－１　豚肉の対カナダ輸出入額の推移

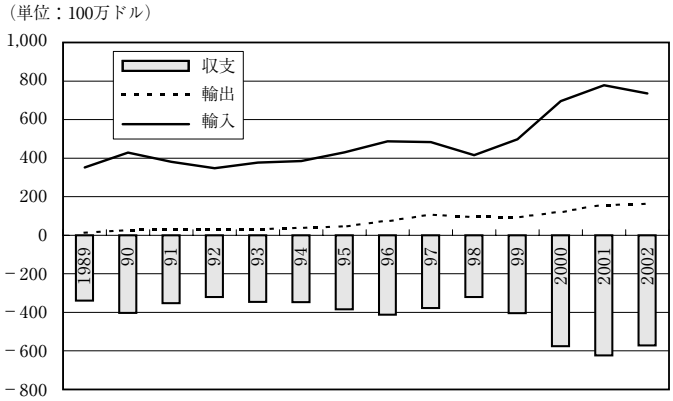
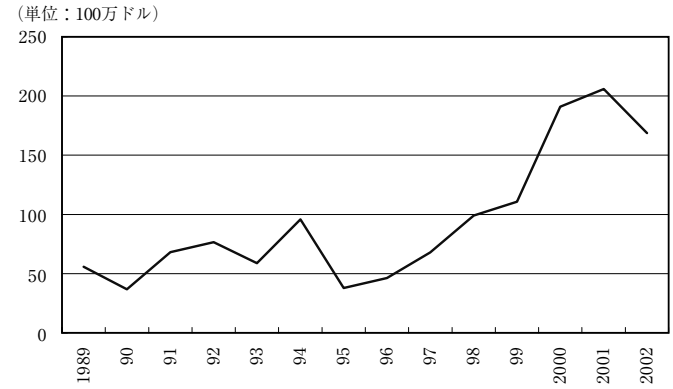


図８－２　豚肉の対メキシコ輸出額の推移



資料：図３と同じ

輸出によって補完するという図式となっている。

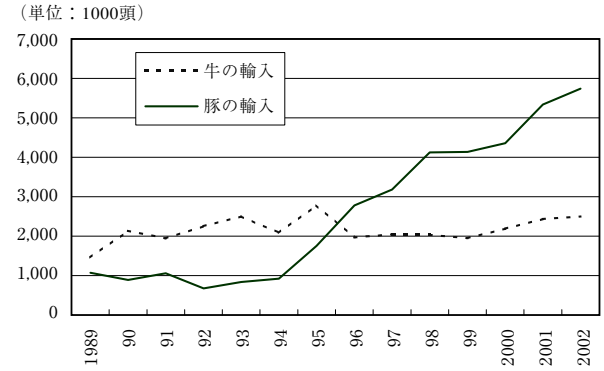
また、近年の畜産物貿易の中でも注目されるのが、家畜の輸入増加である（図９）。特に著しいのが豚の生体取引で、アメリカは完全な輸入超過である。95年に前年の90万頭からいきなり170万頭に急増すると、その後も加速度的に増えつづけ、2002年には574万頭にまで拡大している。これに対して輸出頭数は2002年でわずか12万頭であり、輸入頭数に比べればほとんど無視できるほど小さい。輸入相手国はほぼ100％カナダで、カナダから大量の豚が一方的に流れてくることになる。輸出については、貿易データベースではメキシコのデータが不明であるので断定はできないが、ERSのレポート[4]によると99年から2001年までの３年間の平均頭数をみるとメキシコが78％を占めているという。カナダはわずか３％である。

牛の生体取引においてもアメリカは完全に輸入超過国である。2002年をみると、輸入頭数が250万頭なのに対して、輸出頭数はわずか13万頭にすぎない。

輸入相手国をみると、やはりカナダが最大で2002年に170万頭（67％）を輸入している。豚と異なりメキシコからの輸入も多く、残り80万頭強をメキシコから輸入している。ただし、図９が示しているように、豚の輸入が90年代半ばから急激に拡大したのに対して、牛の輸入は2001と2002年こそ大きく増えたが、全般的に200万から250万頭の範囲で推移しており、豚のような劇的な変化は生じていない。この点が豚と牛の大きな違いである。

さらにこのように急増した豚の輸入の詳細をみると興味深い。残念ながら生体輸入に関して肥育素豚とと畜用肥育豚別のデータを入手できないので断定ができないが、同じERSのレポートによると2002年にカナダから輸入された生体豚のうち64％が肥育素豚であったという[5]。しかも、89年時点では肥育素豚の

図９　家畜（生体）の輸入頭数の推移



資料：図３と同じ

比率はわずか16％であっただけに、90年代半ば以降の急激な増加は、肥育素豚の輸入増加に負うところが大きいものと推測される。逆に、生体での輸出においてはと畜用肥育豚の比率が高い。85年から2001年までの平均値をみると、総輸出頭数のうち62％がと畜用肥育豚で、メキシコに限定すると74％が肥育豚であるという[6)]。この点からみても、対カナダと対メキシコの生体貿易は明らかに特徴を異にしている。なお、牛については詳しい数値を入手することはできないが、一般的にカナダからはと畜用牛が、メキシコからは肥育素牛が輸入される傾向があるという。

このような豚の90年代半ば以降の急増は明らかに牛とは異なる豚特有の現象であり、NAFTAなど外的環境の変化だけでは説明できない。国内の養豚のあり方に変化が生じていることを示唆している。

4　まとめ

94年に発効したNAFTAの影響もあり、北米地域内貿易はアメリカの農畜産物貿易において、その存在を増している。しかしながら、その構造は、カナダからアメリカ、メキシコと一方的に流れるきわめて偏った構造となっている。牛肉にしても豚にしても、最後に日本（牛肉では韓国も）という輸出市場が存在してはじめて完結する図式となっている。

また、近年注目されるのが豚の生体での取引増加である。牛の場合、取引頭数は90年代を通じてほぼ一定であるが、豚の取引は90年代半ば以降急増している。さらにこのように急増した豚の輸入の詳細をみると興味深い。USDAのレポートによるとカナダから輸入された生体豚のうち肥育素豚の比率が増えているのに対して、生体での輸出では逆にと畜用肥育豚の比率が高いという。

このように畜産をめぐる問題はアメリカの国内問題としてのみとらえることはもはや不可能である。政策も北米全体を対象としなければならない。この後は、北米地域の域内貿易とアメリカ国内の養豚業の連動性の実態とそれが及ぼす影響について分析を進めたい。

（大江徹男）

1）　アメリカの農畜産貿易における高付加価値製品の役割については藤本（2003）を参照。

2）　USDA ERSのホームページより（http://ers.usda.gov/briefing/agtrade/usagriculturaltrade.htm）

3）　渡辺・樋口（2001）を参照。

4）　ERSのホームページのデータより（http://www.ers.usda.gov/Briefing/Hogs/trade.htm）

5）　ERSのホームページのデータより（http://www.ers.usda.gov/Briefing/Hogs/trade.htm）

6）　ERSのホームページのデータより（http://www.ers.usda.gov/Briefing/Hogs/trade.htm）

引用・参照文献

大江徹男（2002）『アメリカ食肉産業と新世代農協』日本経済評論社。

渡辺裕一郎・樋口英俊（2001）「メキシコの豚肉産業の概要」『畜産の情報』農畜産業振興機構、12月号。

藤本晴久（2003）「米国における農産物・食品貿易政策の新展開―高付加価値生産物（High-Value Agricultural Products：HVP）輸出政策を中心に―」『農業市場研究』農業市場学会、第12巻第１号（通巻57号）。